

「身近な地域」の教材構成に関する研究

奥 本 繁*

I. はじめに

「中学校学習指導要領」の改訂（1977・7・23）に伴ない、新しい教育課程の基準が昭和56年度から実施されている。特に、社会科地理的分野では「世界とその諸地域」が先習となり、現場では戸惑いがみられた。

「日本とその諸地域」の中に「身近な地域」が含まれることになり、従来は地理的分野の導入として1学期に地理巡検を実施していた学校が取り止めるなど、地理巡検に異変が起こりつつある。今回の改訂（文部省、1978）では、「身近な地域」を、学校所在地を含む地域の学習と結び付けて扱うことによって効果的な指導を期待しているので、従来の地理巡検の見直しが必至となろう。

以下、小論では改訂の趣旨をおさえ、教科書記述内容の比較分析、現場の実践例等の検討の中から、「身近な地域」の学習に関する教材構成の在り方について論じる。

II. 「身近な地域」を取り上げる視点

(1) 地理的見方や考え方を育てる

身近な地域は、生徒が直接体験できる社会事象が存在するので、意図的に社会の基盤、機能、構造等を具体的に理解させることができる。特に、自然環境、産業、人口、開発、交通、住居等の地理的事象の中から、幾つかを関連的に取り上げて教材構成することによって地域の特色を具体的に把握させる学習を展開できるので、身近な地域の学習は社会科学習を効果的に進めるためにも重要な教材といえる。

地域の特色を把握させる過程において、生徒に要求される能力は、地理的な見方や考え方であろう。様々な地理的事象を、どのような観点から把握し、それらがもつ意味をどのように考察するか

という能力を身につけさせることが、地域の特色をより正確に、深く理解させ、さらには日本や世界へ視野を広げる能力の基礎となる。具体的には、①位置、分布、人口等の地理的事象相互の関連を考察する能力、②2万分の1、5万分の1等の地形図を読み身近な地域に活用する能力、③統計その他の資料を処理し活用する能力、④地域のことについて調べたことを発表する能力などを育成することである。

(2) 地域を生態的、動態的にとらえる

世界地理先習になってから、生徒の地理離れが一層増加しているように思われる。教材の画一化、抽象化、マンネリ化が進み、生徒の心情に訴える魅力的な教材の開発が遅れているのもその一因であろう。

「身近な地域」の学習は、生徒が生活する地域に根ざした学習であり、具体性に富んだ教材構成がなされるので生徒にとって最も身近な学習となる。今回の改訂で強調された、人間生活の重視、民俗文化の教材化など、生徒の興味・関心の持てるものを考慮し、主体的な活動を通して学習させることが大切である。

特に、観察や調査という学習活動を通して身近な地域といわれるところの社会事象が、経年ごとにどのように変化し、生態的にどんな動きをしているかなどを解明していく。生徒にとって何らかの生活経験の豊富な地点を中心に、10年前、5年前と変化を追っていくと、地域性とか、一般的な傾向も把握できる。

このような変化は、身近な地域全域に影響を与える場合とか、局所的なこともある。地域のある地点が核となって、そこから隣接する地域に影響を与え、地域の変化が拡大される場合その進行状態を時間軸で把握する必要がある。地域は常に生態として変化していることを前提に、目的に応じた観察や調査の方法を明確にし、多面的な把

* 札幌市立陵北中学校

握をする必要がある。

ところが、実際には、地域をこのようにとらえ学習をしているとはいえない。「身近な地域」の学習にともなう、時間数の不足、予算の不足、交通事故の心配、指導体制の不備等の問題点が原因ともいわれている。しかし、地理学が土地に立脚した実証的科学であることからも、地域の具体的な地理的事象にふれて、その事象を多面的に把握することは、地理的な観察力、思考力、判断力を養うと同時に、地理的な見方や考え方の基礎を養うことになるのである。

(3) 作業学習を取り入れる

身近な地域の学習では、地形図、土地利用図、都市計画図、用途地域図など、特に大縮尺の地図を使用することが多い。地図は、日常生活にとって欠くべからざるものであり、地域の投影が、線と記号、必要とする文字、数字によって平面上にいかに表現されているかを読み取る能力が必要である。

地域を地図に表現するに当たって、地域を縮めて表現しているので、縮小レンズの働きを理解する必要がある。また、読図に当たっては拡大レンズの働きも理解しておくことによって地域を把握することが容易になろう。

地図には、様々な情報処理が目的によってなされていることから、地図に表現する能力、地図を読む能力の育成が期待されている。授業では時間的制約の関係で描図よりも読図にウェイトがおかれるのは仕方がないとしても、地図ができるまでのプロセスについてはふれておきたい。読図に当たっては、等高線、土地利用等については、作業学習を通して体験的に理解させることが大切である。

作業学習は、地域観察、描図・読図、統計その他の資料、などを利用する作業などいろいろ考えられるが、生徒の自主的な活動に大きな意味がある。したがって、学習の目的や生徒の発達段階等に十分配慮し、必要以上の作業を要求しないように心掛けたい。

(4) 地域に対する愛着を育てる

社会科は、民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の育成を、小・中・高等学校と一貫してねらっている。公民的資質に関

しては、国際社会という視点も強調されているが（魚住、1987），重要なことは、地域に対する愛情を育てることであろう。地域に対する理解と愛情は長い歴史と伝統によって培われるもので、他から与えられるものではない。最近、「地方の時代」とか「一町村一品」という言葉が使われ、地方の自治的気運が高まり、住民運動も活発化しているだけに、偏狭な「おらが地域」的な愛情を育てないようしなければならない。そういう意味で、従来の郷土愛とは違った地域愛を育てる視点を摸索していきたいものである。

III. 教科書（地理的分野）における「身近な地域」の取り扱いについて

「身近な地域」を教科書ではどのように取り扱っているであろうか、8社¹⁾の教科書の学習内容を比較・検討してみよう。

「身近な地域」にページを多く割いているのは、18ページの学習（6.1%）、16ページの中教（5.1%）・清水（5.0%）、14ページの東書（4.6%）・日書（4.6%）などであり、最低でも10ページ（帝国）を当てている。しかし、ページ数のみで身近な地域の取り扱いについての軽重を論ずることはできない。

(1) 等高線の読み方

等高線についての説明は、「海拔高度が同じ地点を結んでえがいた地図上の曲線」（帝国、学図、日書、大阪、清水、中教）、「高さの等しい地点を結んだ曲線」（教出）、「5万分の1の地形図は、ふつう20mおきに等高線が引かれている」（東書）の三つに分けられる。この部分だけを見れば、尾根と谷を図解した、帝国、学図、大阪が分かりやすい。また、等高線の間隔と土地の傾斜を図解している教出、中教も工夫の跡がある。なお、三角点と水準点についてふれているのは、帝国、教出、日書の3社である。

計曲線、主曲線、補助曲線については、教出と東書以外の6社が取り上げ、断面図も掲げている。その理由は、地図帳との重複をさけたためと思われるが、注として欄外に示すなどの配慮があつてもよいであろう。

身近な地域の学習に関連して取り上げた地図の縮尺は「1/5万、1/2.5万、1/2.5千」（帝国、学図、

中教), 「1/5万, 1/2.5千」(日書, 大阪, 清水)の3種類である。

(2) 地図記号

地図記号については、「かなり詳細に示している」(帝国, 大阪, 清水, 中教), 「おもな記号のみ」(教出, 日書, 東書), 「記号の移り変わり」(学図, 帝国)のように特色がみられる。なお、教科書によつては、「面積のせまいものは省略されます」(帝国), 「地上のものをすべて記入しているわけではない」(教出), 「田・畑などの土地利用のようすは、どの範囲も縮尺どおりにしめしているので、面積を比較することは可能である。しかし、建物・道路・鉄道などの記号は、位置や特色だけをあらわしており、実物をちぢめたものではない。このように、地形図は、「地上の不必要なものはたくみに省略してしまうと同時に、重要なものはめだつようく表現されている。」(学図), 「記号のいわれについて説明」(日書, 大阪), 「地図記号は地形図の文字にあたる」(清水), 「地形図により説明」(東書, 中教)のような様々な対応がみられる。

地図記号を地図帳や地形図に示されているのと同じように掲載するだけでは、教科書で取り上げる意味がどれほどあるか疑問といえよう。そういう意味で、記号のいわれや変遷などについて興味深く解説した方が指導に役立つことが多い。

(3) 折り込み地形図

折り込み地形図にどの地域を取り上げるかは、目的によって悩むところであろう。全国どの地域の学習でも範例とされる顕著な地域となれば固定されるので、指導する側としても活用の仕方を十分考慮する必要がある。

以下、各社の代表的なものを列挙する。

教出——宇宙からながめた瀬戸内海(人工衛星), 扇状地, 輪中地域, 新宿副都心の高層ビル, 浦安, 土地利用からみた札幌のまち

学図——中央日本(ランドサット), 100万分の1, 20万分の1, 5万分の1, 2万5千分の1, 扇状地, 三角州, 河岸段丘, 丘陵の開発, 静岡市の中心部と土地利用図

日書——段彩図, 小田原の土地利用の変化, 写真(笠焼き祭り, みかん選果場, 箱根細工, 小田原駅前)

大阪——ルートマップ, 段彩図, 1万分の1, 5

万分の1, 20万分の1, 奈良の土地利用図, リアス式海岸, 扇状地, 三角州, 2万5千分の1, 垂直写真

清水——5万分の1「小田原」, 小田原の空中写真, 断面図と段彩図のつくり方

東書——5万分の1, 20万分の1, 2万5千分の1, 1万分の1, 三角州, 扇状地, 新宿

中教——20万分の1, 5万分の1, 2万5千分の1, 1万分の1, 道路地図, 扇状地, 三角州, 土地利用, 2万5千分の1の地形図のおもな記号, 国鉄高尾駅付近のようす, 八王子市の位置

帝国——折り込み地形図はない。

折り込みの場合は、地図帳との関連や教科書の採択地域によって、様々な対応がなされているといえる。帝図のように折り込みを使用せず、本文中に「野外観察の例」として岡山の2万5千分の1地形図や倉敷と茶屋町の2万5千分の1地形図、倉敷の新旧地形図を入れたり、東書のように2万5千分の1地形図(揖屋), 飯梨川の三角州, 飯梨川流域における米の収穫を地形図と写真で示すなどの工夫がみられる。なお、扇状地も同様の扱いをし、東京副都心新宿の変化を1万分の1, 2万5千分の1, 2万分の1の地形図に示しているなど、読図の解説と併せて編集する傾向が見受けられる(例えば、学図, 大阪, 中教教出など)。折り込み地形図のなかでは、人工衛星から撮影した写真(教出, 学図), 立体視(学図), 道路地図(中教)がユニークである。

(4) 身近な地域の観察と調査

観察と調査については、ほぼ、①の地域の特色, ②地域の変化, ③地域と地域の結びつき, の3点について書かれている。

教出の目次を事例として掲げる(表1)。

表1 教出の目次

- 地域を歩いてみよう
 - まちを歩く
 - 古い地図と新しい地図
 - 郷土史と遺跡
 - 生きた歴史の証言
- 地域のすがたを調べてみよう
 - 統計資料の利用

人々の動き

物の動き

- 人々の生活を調べてみよう
 - 産業の変化と人々の生活
 - 農業と農家のくらし
 - 漁業と漁民
 - 工業と工場で働く人々
 - 商業・交通とくらし
- 他地域を調べてみよう
 - 故郷を行く
 - 農山漁村を調べてみよう
- 地域を見なおしてみよう
 - 地域に生きる

教出のように総論的なものから、観察の準備やルートマップによる観察事項を示し、さらに調査例を書いたもの（学図）、地域の変化・特色・むすびつきの調べ方に力を入れたもの（大阪）、ルートマップと観察項目や調査の内容・方法・まとめ方、調査例の充実しているもの（中教）、調べたことをまとめることに力を入れたもの（東書）、などがある。どの教科書も、観察と調査の方法について具体例を挙げながら説明しているので、身近な地域の学習に有効である。実際の授業に際しては、概観を先に行いながら見通しをもたせることもできるし、また、細部について参考にしながら展開することもできる。

以上、教科書で地域をどのように扱っているか、比較・分析をしながら考察してきたので、各社の特色は明確になったであろう。しかし、教科書を活用するのは指導者であり、指導計画なので、地理的分野の学習の視点をふまえた展開が大切である。換言すれば、地理的な見方や考え方、地域の生態的動態的把握、作業学習、地域に対する愛着、の4点をふまえた身近な地域の指導計画を作成し、どこでどのように教科書を活用するのかを位置づけておくのである。指導計画は、いつ実施するかという時期によって、社会科学習としての導入になったり、内容の深化充実になったりもするであろう。学校事情によって、年間計画に位置づける学習内容にも変化を及ぼすと考えるので、教科部会等で論議を尽くし、より厳密な位置づけをすることが残された重要な課題である。

IV. 二十四軒地区を中心とした教材構成

二十四軒地区の学習を「日本とその諸地域」の導入と位置づけ、北海道地方を先に学習し、それから九州地方、中国・四国地方という順で進めている。

北海道地方を学習するに当たって、図1のような教材構成を考えた。

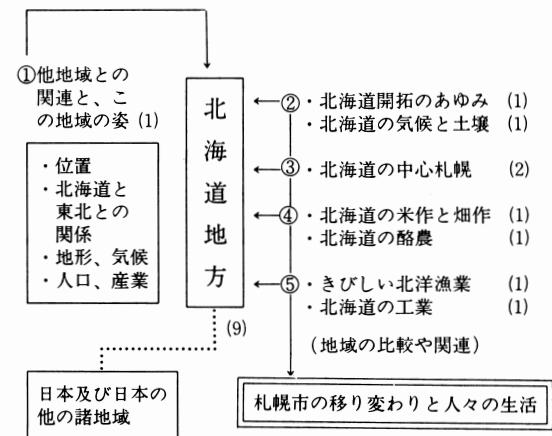


図1 北海道地方の教材構成の例

() 内は配当時間、○内は学習の順序

全体で9時間を配当し、①～⑤の順で学習を進めていくが、どの時間も「札幌市の移りわりと人々の生活」につながっていることを示している。

教材構成をしていく場合には、表2のような手順を考えて進めている。

表2 教材構成の手順

| | |
|---------------|-----------|
| 1 事前調査 | 6 教材の構成 |
| 2 指導目標の分析と決定 | 7 指導計画の作成 |
| 3 素材探し | 8 学習指導 |
| 4 教材の精選 | 9 評価 |
| 5 教材に対しての資料選択 | 10 改善 |

「1 事前調査」は、次の16項目について「知っている」「よく知らない」を選択させ、「知っている」を選択したときは、その事実も記入させた（1987年8月陵北中1年82名）。

①二十四軒 ②札幌市中央卸売市場 ③地下鉄

琴似駅とJR琴似駅 ④山の手 ⑤西区役所・西区民センター ⑥琴似屯田と今の市街地 ⑦国道5号線 ⑧発寒扇状地 ⑨琴似バスター・ミナル ⑩路線式商店街 ⑪琴似の農業 ⑫琴似神社 ⑬デパート ⑭札幌中央競馬場 ⑮身体障害者福祉センター ⑯八軒

その結果、「知っている」と答えた事項は⑬デパート(61.0%) ③地下鉄琴似駅とJR琴似駅(48.8%) ②札幌市中央卸売場(46.3%) ①二十四軒(41.5%) ⑨琴似バスター・ミナル(31.7%)であった。また、「よく知らない」と答えた事項では、⑩路線式商店街(87.8%) ⑪琴似の農業(87.8%) ⑥琴似屯田と今の市街地(85.4%) ⑧発寒扇状地(85.4%) ⑤西区役所・西区民センター(56.1%) ⑯八軒(56.1%)であった。特に、⑥琴似屯田と今の市街地 ⑧発寒扇状地 ⑩路線式商店街の3項目については知っていると答えた者がゼロであった。このような簡単な事前調査を行うことによって生徒のレディネスを把握し、「2 指導目標の分析と決定」を行っていく。「二十四軒地区の変遷と人々の生活」を中心におき、表3のように7つの視点と12の教材を

表3 二十四軒地区の変遷と人々の生活

| | | ◎ 特に関連のもの | | | ○ 関連のあるもの | | | | | |
|-----------------------|------------|-----------|--------|--------|-----------|-------|-----------|----------|-------|-------|
| | | 大きな地図 | 野外観察 | 地域の特色 | 地域の歴史 | | 他地域との結びつき | | | |
| | | 屋上からの観察 | 地形図の見方 | 地形図の作業 | 観察の目的・コース | 観察の実施 | 観察の整理・発表 | 地域の地形・気候 | 校区の産業 | 人々の生活 |
| 身 近 な 地 域 | 地理的事象 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 歴史的事象 | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ |
| | 地形図の読み方 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| | 観察調査 | ○ | | | ○ | ○ | | | | |
| | 地理的見方・考え方 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 歴史的見方・考え方 | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ |
| | 生活する土地への関心 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

準備し、それぞれの関連を○と◎で示した。

図2に、「6 教材の構成」を示す。

紙面の関係で先に挙げた10項目全てについて述べることはできないが、評価と改善という点では、より充実した地域学習を進める意味で指導者の謙虚な姿勢が大切である。

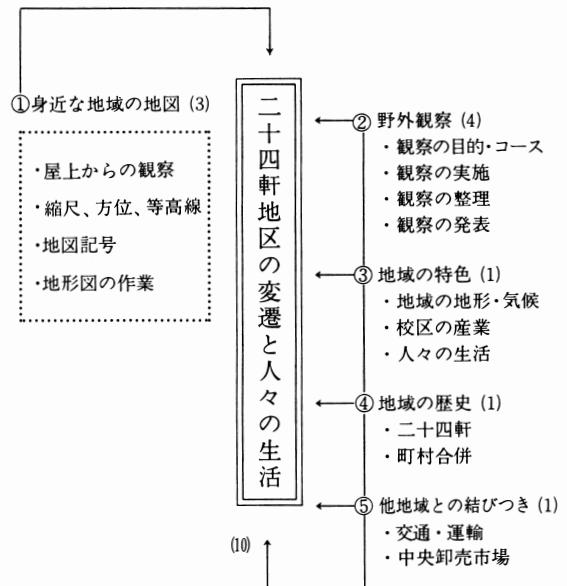


図2 二十四軒地区を中心とした教材構成の例

V. おわりに

「身近な地域」の扱いは、従来実施されてきた地理巡査の見直しをはかるものであり、それだけに新しい在り方を模索しなければならない。バスを利用して校区を拡大した地域を対象とした地理巡

検は、一部の学校を除いて、経済的、時間的、人事的事由により衰退し、それにかわって、校区を歩く地理巡検が増えつつある。

小論では、「身近な地域」を取り上げる視点について地理学習の本質をふまえながら指摘してきたが、大切なことは地理的認識の基礎・基本を養うことである。したがって、教科書の使用に当たっても、既に考察を加えた4項目を中心に内容の分析を行い積極的に活用していく方法を考えいかなければならない。

最後に示した事例は、教材構成の手順を仮説として紹介したものである。既に述べた視点や教科書分析の結果を十分に生かしたものにはなっていないが、今後、実践の積み上げにより改善をはかっていきたい。

注

1) 8社とは次の通りである。

- 中学新地理（46 帝国地理 724）
- 中学社会 地理的分野（17 教出地理 722）
- 中学社会 地理（11 学図地理 721）
- 中学社会 地理的分野（1 日書地理 717）
- 中学社会 地理的分野（3 大書地理 719）
- 日本の国土と世界（35 清水地理 723）
- 新しい社会（地理）（2 東書地理 718）
- 世界と日本の国土（5 中教地理 720）

引用文献

- 文部省（1978）：『中学校指導書社会編』
大阪書籍株式会社 58 ページ
- 魚住忠久（1987）：『グローバル教育の理論と展開』
黎明書房 22～25 ページ

参考文献

- (1)木川達爾・佐藤照雄・鈴木健一（1981）：『社会の主体的・協力的授業』（講座7）ぎょうせい
- (2)朝倉隆太郎・平田嘉三・梶哲夫（1976）：『社会科教育学研究3』明治図書
- (3)杉村暢二・次山信男（1980）：『教職の地理学』 大明堂